



「独　　り　　言」

番　匠　谷　隆*

僕の住んでいる所は、京都の四条河原町から歩いて五分程の、どちらかといえば街の中心地にある。家は駐車場をやっており、朝から晩まで車の洪水である。だから家族の生活はバラバラで、ここ数年一家だんらんといった雰囲気味わったことがない。こんな生活になってしまったのは今から五年前のことである。僕の家はもともと今と違った商売をしていたのであるが、都合で京都に移らざるを得なかったのである。僕としては、大阪のごみごみした生活から解放されるという気持ちがあったので、これには大いに賛成した。ただ問題であったのは、駐車場という新しい仕事と、僕が浪人中であったということである。両親にすれば仕事もさることながら、僕のことが相当気にかかっていたらしい。しかし僕が賛成したので思い切ったのだ、と今でも時折話してくれる。こちらに移ってからは、すべてが最初から始まるわけで、皆それぞれつらい思いもした。例えば車、他人の車など動かしたこともない僕たちが、その日から動かさなければならぬのである。父は免許を持っていたが、僕は持っていなかったの、僕自身随分歯がゆい思いをした。忙しくて猫の手も借りたいような時でも、僕はただ車を見ているより他に何もできなかったのである。そこで毎晩仕事が終わってから運転を教えてもらい、二週間程で普通の車なら動かせるようになった。だから大きい声では言えないが、浪人中から僕は無免許で車を動かしていたことになる。それから当時、気分転換だといったら、京都の街をあちこち見て歩き、今から考えると浪人中が一番気楽だったような気がする。もう一つ浪人中の思い出といえば、僕の作った曲がレコードになって出たことである。もっとも売れ

ずにすぐ廃盤になってしまったが、これは東芝のあるラジオ番組の十周年記念として「若者の歌」というのを募集していたのがきっかけである。そこで僕も一度応募してみようということを出したのが入選したわけである。ほんの二時間くらいでできた曲だったのだが、まぐれ当たりというのは恐ろしいものだとその時つくづく思った。しかし元々僕の趣味は音楽を聞くことと、曲を作ることであるから、それを認めてもらえたことは非常な喜びであった。そして僕にも運が向いて来たのだから来年の入試もうまくゆくぞ、などと一人ではしゃいでいた。そして次の年、本当に首尾よく大学に合格したわけであるが、今思うと趣味でやっていた音楽が随分浪人という圧迫感を和らげてくれたものだと思う。そこで話は少し変わる。ことになるが、その有難い趣味を持てるようになった経緯などを次に聞いていただきたい。

僕が音楽に興味を持ち始めたのは中学時代である。この頃は、加山雄三が全盛で、すぐにエレキブームもやって来た。そんなわけでスマートさを売り物にしている僕としてはエレキをやらなければいけない。そう思って両親に懇願してエレキを買ってもらった。そしてすぐにバンドを作って文化祭に出たり、あちこちの放送局のオーディションを受けたりした。これが音楽に興味を持つようになった直接の動機である。このようにやかましい音楽をやっていた反面、学校の音楽の授業を声楽で有名な東保先生が指導されていた関係から、クラシックにも興味を持つようになった。おかげで、やかましいロックと静かなクラシックの両方とも聞くようになったわけである。それから後は、自分で自分の音楽というものを捜すようになり、今ではジャンルを問わず何でも聞くようになってしまった。だから僕のレコードライブラリーにはクラシックからジャズ、ポピュラー、歌謡曲、あ

*番匠谷隆 (Takashi BANSHOTANI) 大阪大学
大学院工学研究科精密工学専攻津和研究室 (内線
4608) 前期課程1年次

げくの果てには軍歌まで入っている。そんなわけで、ある友人は僕のレコードを見て吹き出したこともあった。しかし人は皆違った感情を持っているわけだし、その時その時の気分で聞きたい音楽も変わるのだから僕としてはちっとも恥しいとは思っていない。それからレコードの話が出たので、ついでにその聞き方も話しておくと、僕はレコードを買ってもそれについている曲の解説といったものはほとんど読んだことがない。読むことで変な先入観が入ってしまうのがいやだからである。音楽を聞くのは僕自身であって、他人の意見を聞いているのではないのだから。こんな風だから僕はいつまで経っても音楽の物知り博士にはなれそうにない。しかし音楽を聞く心は、その分だけ純粹だと思っている。

このように僕の中の音楽史、音楽感は作られてきたわけであるが、僕にとってこのように大きな位置を占めている音楽も時として色あせることがある。

それは大学に入って好きな女性ができた時のことである。音楽はその時ほんのバックグラウンドミュージックの役割しか持たなかった。僕は時間をすべて彼女との交際に費やした。お互いに時間ができると連絡して、何とか都合をつけて会ったものだった。それに僕が忙しい時など、彼女が京都まで会いに来てくれたりした。そんな風に彼女は、僕に対する気持をいつも素直に表現してくれた。僕もまた彼女に対しては嘘のない真実の姿で接していたつもりである。お互い、とりわけ僕にとっては相手の気持がはっきりわかって信頼して交際できるということは幸せであった。——しかし僕が大学院に進学することが決まった時、彼女は理由も告げずに去っていった。その時僕は後を追わなかった。というより追えなかったのである。その時の僕には彼女を引留める言葉はなかったのである。かくして僕の淡い恋も終わり、その後しばらく恋らしい恋はしていない。ただ彼女との交際を

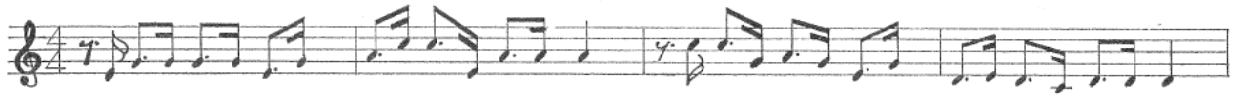
通じて得たことが一つある。それは人に愛されるより、人を愛することができる人間にならなくてはいけないということである。そうでなければお互い信頼して交際してゆけるはずがない。だから今度、人を好きになる時には僕も素直な気持で付き合いたいし、相手の人もそういう気持になってくれる人とめぐり会いたいと思っている。随分勝手なことを言ってきたが、僕自身恋愛の話は疲れてきたのでこの辺で終わりにして、最後にとっておきの話を紹介したい。

これはこのコラムに僕が文章を書くことになった直接の原因でもあるのだが……

それは僕が二年の時にNHKの「あなたのメロディー」という番組に出たことに端を発している。それを現在僕が所属している研究室の先生がたまたま見ておられて、僕が研究室に配属されるやいなや、そのことは研究室中に広まってしまったわけである。それから、僕は音楽家だということになって、とうとう研究室の歌なるものを作らされる羽目になったのである。最初は時間がないとお断わりしていたのであるが、それがつい最近津和先生が自ら作詞して下さったので、いよいよ曲を付けざるを得なくなってしまったのである。曲は「津和研音頭」というもので、愛だとか恋だとかいう曲しか作ったことのない僕にとっては、いささか勝手が違って困ったのであるが、何とか曲としての形だけはついた。出来上がってみれば、どこかで聞いたような気もする曲になってしまったが、所詮音頭というのは似たり寄ったりだということで我慢していただくことにした。しかし酒などを飲みながら歌うと結構まともに聞こえてくるから不思議なものである。皆さんも自分の研究室の歌など作って一層和を広げられてはいかがかな……

以上、とりとめのない僕の独り言にお付き合いいただいたことを心から感謝し、ペンを置く次第である。

ツワ研音頭



1 おとこいっぴき じっけ んし つ で あせとあぶらに まみれてくらす
 2 すいたキャンパス こいき なと ころ よいまちぐーさの はながさくー
 3 せいみつツワケン はんだいの は な よ せんば いこうはい ひとつになっ
 4 おおしくーとおぞ そつぎょうし たら オレはてんかの エンジニヤー



じっけ んけ っか は すじがね い り よ せかいのが っか い うーならーせー
 か わい いあ のこ は かたえ く ぼー ー ひぐれにツワケン おーとづーれー
 けんさ くけ んま で こころを み が き じんせい べんきょうで みーらいを ひら
 にっぼん のこ うぎょう そうけ んに ー にのう て た ー つ ぞ おーとこーだー



1~4
 るるく
 エエゾツワケン ソーレ ソレ

ツワ研音頭

作詞 津和中達
 作曲 番匠谷小達

一、男一匹 実験室で

汗と油にまみれて暮す
 実験結果は 筋金入りよ
 世界の学会うならせる

エエゾ ツワケン ソーレソレ

二、吹田キャンパス 小粋なところ

宵待草の花が咲く
 可愛いあひの娘は 片えくぼ
 日暮れにツワ研訪づれる

エエゾ ツワケン ソーレソレ

三、精密ツワ研 阪大の華よ

先輩後輩一つになつて
 研削研磨で 心を磨き
 人生勉強で未来を啓く

エエゾ ツワケン ソーレソレ

四、雄々しく飛ぶぞ 卒業したら

オレは天下のエンジニア
 日本の工業 双肩に
 担うて立つぞ男伊達

エエゾ ツワケン ソーレソレ

(昭、五一、六、一五)